

日本の労働慣行について

一六四三三

午前中の審議を聞きながら、私もしみじみと、今回の労基法の改正、問題点がかなり見えてきたな、こういう気がいたしております。

そんな中で、実は昨日でございますが、ちょっと目にとまった産経新聞の記事があります、ある意味では大変私もショックを受けた記事でありまして、大臣もお疲れだろうと思っておりますので、ちょっと冒頭にこの新聞の記事にまつわる話をさせていただこうと思っております。

実は産経の記事に「アピール」という、これは多分投書の記事だろうと思っておりますが、名前は申し上げませんが、ある方が投書をされておられます。会社員、四十五歳の神奈川県にお住まいの方であります。

この方の「アピール」の論旨は、日本のサラリーマンは今まで終身雇用制という閉鎖的な労働市場のおかげで過保護の状態にあつたと言えるという書き出しでございます。午前中もそういう議論があつたと思うのですが、極端な話をすると、開かれた労働市場の中で通用するような能力を持たない人も結構いらつしやるというような厳しい事柄が書いてあります。

我が国のサラリーマンは終身雇用制という労働市場での保護政策によって、自分の能力を上げるという努力を怠ってきた。企業内で

出世するためのもつと効率のよい手段、この方は、人情を利用する、社内人脈構築、この技法習得に奔走している、本当に、職務能力といますか、そういうものを磨く努力を怠っているのではないかと、我が国独特の労働慣行の中でこんな現象もあるのではないかと、改めて私は驚いて見たわけでありませう。――

この方の結論は、こういう日本のサラリーマン社会が今、まさにグローバルな競争時代を迎えて労働環境の変革に直面している。労働市場のビッグバンだ。この方の言葉ですよ、暗黒の封建社会、人情が支配した労働環境から近代社会、オープンな労働市場に通用する能力を重視する労働環境へと夜明けを迎えようとしている。

私は、書いてあることは全部賛成ではありません。しかし、ある意味では、まさに今の時を指している指摘だな、こう思うわけであります。

結論部分になりますと、本当に切実な話であります、明治維新の際に多くの武士が精神的にも経済的にも路頭に迷つた。同じように、これから多くのサラリーマンが路頭に迷うであろう。それは新しい社会を構築するための産みの苦しみだ。ここしばらくは混乱の時代が続くだろう、その先には明るい未来というふうに書いてあるわけですが、明るい未来にしなければならぬということだろうと思えます。

私は、書いてあることに全部賛同はできません。しかしながら、指摘については確かにうなずける部分もありまして、こうしたこの会社員の方が感じておられるようなことが、まさにその一環として、

今回の労働法制、この労働基準法の改正もまさにそういうときかなという気がしております。

それで、午前中の審議でもありましたけれども、この方はビッグバンという言葉を使っていますが、恐らくこじばらくは混乱が続くであろう。ある意味では、私はそういう混乱の時代がしばらく続くのだからと思うのですが、労基法の精神といえますか、我が国の労働法制の形の中で一番注意しなければいかなのは、そういう開かれた労働市場に至るに当たって、やはり今までの労働者保護の観点、そうしたものも十分踏まえながら、ソフトランディングをしながら新しい時代を開いていくということが大事なのではないかというふうに私は思っているわけでありませう。

こうした困難な時代あるいは変化の時代におきまして、基準行政のあり方というのはどうあるべきか。大臣のお話を聞いて、お話は大体想像できるのでありますが、この新聞記事の感想も踏まえて、まさにこういう変化の時代、この方は、混乱の時代が続くだろう、こうおっしゃっていますが、そうした時代にあつて、基準行政はどうあるべきか、そういうちょっと大きい話で恐縮でございますが、大臣の御所見を伺いたいと思ひます。

伊吹国務大臣 いつも公平に物事を見ながら、的確な御質問をいただいている榎屋先生でございますので、あえて今の労基法に対してやや追いつきの意味での新聞記事も引用されたのだと私は思ひます。

率直に申しまして、労働慣行、労働市場を含めまして、やはり戦

後の日本というのは、護送船団と言つてまたしかられるのですが、お互いに弱い人たちが公的な施策で助けながら全体として成長をしていくというやり方を日本はとつてきたと思ひます。それはそれで大きな成功をおさめたわけですが、その成功のかぎという一つの秘密は、午前中の棚橋委員の御質疑にもありましたけれども、頑張つて自助努力をし、自己責任を果たしている人たちに不満が出なかつたのは、やはり右肩上がりの成長というものがあつて、その不満を帳消しできるほどの大きな成長があつたと思ひます。したがつて、そこから税という形、保険料という形でお金をとつて、そしてそれが比較的社会的弱者と言われる人たちのところへ回りながら、今日の状況をつくり上げていった。

私は、これはこれで評価をすればいいと思ひますが、さて、これから右肩上がりの成長が続くのであるうか。あるいは、かつては六十歳、六十五歳の方は、非常に珍しい時代では社会的弱者であつたと思ひます。しかし今、七十歳以下の人というのは社会で珍しい存在でも何でもなくて、社会の中の有力なシエアを占められる日本の、パートナーという仲間でございますから、この人たちがむしろ弱者として遇するということの方が果たしていいのかどうなのか。

戦後、職がないときは、働く者というのは弱者であつて、そして職を与える者は強者であつたかも知れません。しかし今や、ミスマッチという言葉で言えば格好はいいですけども、有効求人倍率が一を超えているにもかかわらず失業率が非常に高いという世代も

出てきているということになりますと、さて、午前中の棚橋委員の御質疑にもあつたように、やはり頑張っている者、自己責任を果たした者は相対的にその報酬を得たいという気持ちが一方向に出てくるということは、私はこれを否定いたしません。

しかしながら、ここに言っているような日本的な慣行というのは感心したことではないかも知れないけれども、それによって社会がある程度成り立っているという部分がありますので、急激にこれを自由競争、市場原理にすべてゆだねてしまうというようなことはいいのだろうか。特に労働というのは、人間という、命を持っている、最も尊厳のあるものが果たす行為であるだけに、私は、やはりそこにはある程度の規制というものが当然入ってきてしかるべきだと思います。特に、頑張つて努力をしているから報われるのは当然であります。しかし、頑張ろうとしても頑張れないという人もいるという